

Advanced OCT Analysis of Biopsy-proven Vitreoretinal Lymphoma

Pichi F, Dolz-Marco R, Francis JH, Au A, Davis JL, Fawzi A, Gattousi S, Goldstein DA, Keane PA, Miserocchi E, Marchese A, Ohno-Matsui K, Sagoo MS, Smith SD, Sobol EK, Tasiopoulou A, Yang X, Shields CL, Freund KB, Sarraf D. Am J Ophthalmol. 2022 Jun;238:16-26. doi: 10.1016/j.ajo.2021.11.023. Epub 2021 Nov 27. PMID: 34843686.

Vitreoretinal lymphoma (VRL)は、早期発見・治療が重要な疾患です。VRLの多くが発症から2-3年以内に中枢神経への浸潤を認めます。確定診断は生検やIL-10（サイトカイン測定）などを用いますが、全ての症例で陽性になるわけではありません。たとえVRLを疑って硝子体生検を行っても、偽陰性の症例が全体の30~45%にのびります。そのため、新たな診断法の開発が急務となっています。Dr. Pichiらは、生検でVRLと診断された患者のOCTデータと細隙灯検査データや全身検査データ、いくつかの網膜病変の画像との関連性を調べた結果、VRLではRPE下と網膜下への細胞浸潤像が最も多く確認されており、VRLの診断に有用であると報告しています。また細胞浸潤のメカニズムについて、網膜血管から網膜内そしてRPE下に至る経路、または脈絡膜側からRPE下さらには網膜下へと浸潤する経路が議論されています。近年のOCT画像は迅速で且つ高精度に疾患を推定できるため、VRLにおいても、今後OCTを用いた臨床診断が重要になると考えられます。

(担当者：大阪大学 丸山和一)